英知大学 同窓会会報

Alma Mater SAPIENTIA

UNIVERSITAS CATHOLICA OSAKENSIS SAPIENTIA
SAPIENTIA ET FORTITUDO

Vol.15
Mar.15.2001

発　　行：英知大学同窓会
〒661-8530
兵庫県尼崎市若王寺2-18-1
発行責任者：野　村　　裕
編　　集：英知大学同窓会

●ようこそ同窓会正会員へ……1
●岸学長ご挨拶「21世紀を迎えて」……2
●就職課だより……2
●同窓会事務局便り……3
●ローラス大生（アメリカ）、英知大に来たる…3
●英文学科5期生同窓会……4
●1975年英文科卒業生同窓会報告……4
●激動の時代には激動の時代の英知を……5
●関東支部便り……5
●IT革命は就職活動を変えるか……6
●これからの英知大学……7
●中国語検定の合格者の増加……8
●留学生達の声……8
●編集後記……8

ようこそ同窓会正会員へ

会長　野村　裕

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。また、同窓会への正会員としての入会を心強く思い、会員一同心から歓迎の意を表します。

益々激動を続けている日本経済の状況下で社会の一員として飛びたたれる皆さんは、さぞ不安と希望に満ち溢れておられると思います。

昨今の官庁及び一般企業において、従来の綻びが明確にでてきており、老舗と言われきた企業ほど、時代の流れについていけず、倒産するところが増えてきています。

その中で、新しい取組み、新しい企業、ベンチャー企業と呼ばれるところが躍進しております。世に言う「IT」情報産業が特に顕著に表われてきていると思います。

我大学は、その流れからいくと遠い勉学の位置にあり、「文学」という哲学・心理・センスという「人文学教育」の領域に位置すると思います。その意味からすると、「自然科学分野」が中心になる社会あるいは会社に就職され苦労及び勉強されていく機会が増えるものと考えます。

本学の建学精神にありますように「人間は動物として身体的存在であるばかりでなく、知的存在者である。本学の使命は単なる知識の獲得に留まらず、人をこの英知へと導くところにある。」と教えているように、機械的及び時代的な部分の重要性はたしかにありますが、人間のもっている「英知」は永遠に不滅なものと思います。

その気持ちを持って、困難な状況に立ち向かってほしいと心から祈るものです。

また、卒業される皆様の多くは大学の四年間を一見自由を求めて入学し、あっという間に自由を享受したつもりで大学を卒業していかれるでしょう。また、社会に出ても、少しは規制がありますが、自由に考え、自由に行動できる部分は多いと思います。しかし、自由を求めすぎるあまり、自己に甘く、節操を欠いた脆弱な体質が生じてくるものです。自由にはそれ相応の責任が伴ないます。「主体的自己責任」というものが、各個人に強く求められことになると考えます。

その中で、「英知大学」を卒業した我々も努力し後輩の為にも未来を切り開いて行く使命があります。何か悩んだり、落ちこぼれたりした時は、心配しなくても皆さんには、帰れる場所があります。最終の学び舎である大学、その我々の「同窓会」であります。

我々、一人一人の力が大きな流れを創ることを全員自覚し、協力し努力していこうではありませんか。

21世紀を迎えて

学長　岸　英司

英知大学は短大創立から数えると今年は創立四十周年の年となります。今まで大勢の皆さんがご卒業になり、社会の各部門でご活躍になり、本当に嬉しいことです。

世界における大学の歴史から考えますと、大学は単なる学問研究の場であるだけではなく、人間形成の場であることは誰でも知っています。

しかし現代では少子化と不景気の世の中で、大学も一つの企業体として生きていかなければならない運命の中に置かれています。

日本中に知れ渡っている著名な大学は別として、多くの大学では今、受験生を獲得するために大学の自己変革を迫られています。

大学の授業を現代の学生の人たちに面白く聞いてもらえるようにはどうしたらよいのか。インターネットを利用して情報を得、また情報を世界に発信して行くことが大切ですが、それにはどのようにすべきなのか、学生による授業評価を大切にしてどのように応えるべきなのか、努力しなければならない問題は山積みしていると言っても過言ではありません。

卒業された皆さんは勿論のこと、大学自体もはげしい競争の中にあります。

グローバル化が進み、国際化が進む世の中では世界共通語の修得はとても大切なことになってきました。人間は話す動物ですが、その言葉が通じないのではコミュニケーションが実現しません。異文化への理解と共に外国語の修得は二十一世紀を生きる私たちにとって大切なこととなっています。

同窓会の皆さんも、この大学で身につけた知識、語学、教養を生かして、人生の成功者となり、日本のみならず、世界中で活躍する人になって下さるよう希望しております。

皆様と皆様のご家族の上に神様のお守りがありますようお祈り申し上げます。

就・職・課・だ・よ・り
「学内・企業研究会」開催される

二月七日英知大学学生会館において、就職部主催・同窓会後援の「学内・企業研究会」が開催された。

当日は小雨交じりながら、熱心な学生が開始時刻の午後一時には、約一五〇名ほど押し掛け、会場は立錐の余地もないほど混みあった。就職活動は、近年インターネットによるエントリーが進む一方、学内での企業研究会が大流行である。

本学でも昨年十一月頃よりご参加いただける企業へのアプローチをしたが、すでに予定が三月までぎっしりとのことが多く、改めて加熱ぶりが知らされた。

参加企業は十六社で、ほとんどが卒業生の在職する企業であった。なかでも、近畿日本ツーリストやノヴァ、アビバ、日本エスリードなどには、順番を待つ学生の列が最後まで絶えなかった。

会場内では、内定を既に手にした現四回生たちが、企業の方々をサービスする一方で、後輩たちを支援する光景があちこちで見られた。就職課では、今後とも積極的に四回生を三回生の活動支援にあたらせることを積極的に検討している。

知らされる習う立場から、知らせる教える立場で学ぶことが多いことを知ってもらうためである。

アンケートを記入し帰る時には、同窓会からの記念品を会長の激励文とともに受取り、活動意欲を新たにしたようであった。

最終参加学生は一六二名、参加企業は十六社で、アイデム・大福信用金庫・アビバジャパン・大阪めいらく・ノヴァ・引越社・ハークスレイ・オージーロイヤル・三城・キャッツ・ジオン商事・トヨタビスタ神戸・近畿日本ツーリストクラブツーリズム・ライカ・松下エクセルスタッフ・日本エスリードの各社であった。

この企画の第二回目が、三月二日に関西学生就職指導研究会（関西の一六〇の大学が加盟）の主催、就職部共催で開催される。この時は、近隣の大学からおよそ五〇〇名の学生が参加する見込である。近隣には女子大が多く、参加企業も女子学生の人気企業でもあり、さながら女子大ムード一色になるのではと思われる。参加企業は、ユニバーサルスタジオやレリアン、ジャヴァ、伊藤ハムなど二〇社となる。今後ともこのような企画を推進する予定であり、卒業生各位の御会社の参加を心から期待しお待ち申しあげます。

同窓会事務局便り

'98英文卒　渡辺　千晶

同窓会の運営にいつもご協力いただきありがとうございます。

昨年十一月三日には例年通り、総会・ホームカミングデイが開催されました。総会への参加人数はいつもと変わらず少なく、寂しい感じもしましたが、今年は活発に質疑応答が行われ、当初の予定を大幅に延長して終わりました。

そして、H・C・Dではいつものような卒業生の自由参加に加え、今年は七十五年卒業の同窓会、またカトリック研究会の同窓会など合わせてのにぎやかなパーティーとなりました。

昨年好評だった、ケルンのスパゲッティをはじめ、たこ焼きやバーベキュー、ドリンクコーナー、オードブルなどのフードコーナーも充実、また昨年多くの先輩方が胸を打たれるほど感動したということで、今回も現役の応援委員会のメンバーにエールを披露してもらいました。退官された先生もご招待しようと、井上博嗣先生、三木英先生、帝功先生にご案内させていただいたところ、帝功先生にお忙しい日程の中参加していただきました。

そして、今回のH・C・D成功の陰にも、前日の準備から、当日の運営・片づけと、細やかな気遣いのいる仕事から力仕事まで頑張ってくれた八人の在学生の力がありました。ありがとう！

さて、突然ですが…。約二年間事務局の仕事をさせていただきましたが、私情により辞めることになりました。私にとって卒業してからも英知と関われたことをとてもうれしく思っています。どれだけお役に立てたかわかりませんが、支えて下さった多くの方に感謝しています。ありがとうございました。

なお、三月より今春の卒業生が事務局員として頑張ってくれることと思いますので、変わらずご支援・ご協力のほどお願いいたします。

《事務局へのお問い合せ先》
英知大学同窓会事務局まで
Tel.&Fax. 06-6498-6258
e-mail:sapiens@mbox.inet-osaka.or.jp
※月・火・木曜日の10:00AM～5:00PM。
それ以外は留守番電話、FAXで受け付けますので、お気軽にお問い合わせ下さい。

ローラス大生（アメリカ）、英知大に来たる!!

英知大学が、アメリカのアイオワ州デビュークにあるローラス大学と姉妹校提携を結んで十五年以上になります。その間多くの英知大生が留学プログラムを利用して、ローラス大学に留学してきました。また、夏のアメリカ研修旅行には毎年十五～二十人の学生が参加し、ローラス大学の広々とした緑豊かな美しいキャンパスで二週間の語学研修を受け、大学の近くにホームステイしてアメリカンライフを楽しんできました。

ホストファミリーの心のこもったおもてなしや、アメリカ中西部の大自然の中でのキャンプやピクニックやカヌー遊びは、彼らの忘れ得ぬ思い出となっています。

この春、はじめて、今度はローラス大学の学生たちが、日本語と日本の文化を学ぶために、五月後半二週間の予定で英知大学へやってくることになりました。数名の英知大の先生方が、日本の社会や文化について英語で彼らに講義をされます。

京都、大阪、奈良への日帰りの旅も計画されています。また、五年前に客員教授として英知大学で一年間を過ごされたローラス大学のトム・ジュエル・ヴィターレ教授とそのご家族も学生たちに同行して来日される予定です。

ホストファミリーの募集

〈期間〉
二〇〇一年五月後半あたり
二週間

〈募集ファミリー〉
五～七家族

〈受け入れ人数〉
一家族一人

〈内容〉
宿泊と毎日の朝・夕食
（二週間で二五〇〇〇円支給）
※原則として二週間ですが、一週間でも結構です。送迎は不要ですが、大学からできるだけ近い方にお願いしたいと思います。
その他、詳細は未定です。

申し込みに関するお問い合わせは、
英知大学国際言語センター
TEL:〇六-六四九一-八五九九
FAX:〇六-六四九一-五四三三

英文学科五期生同窓会

～なつかしの恩師をお迎えして～

英文学科五期生同窓会世話人一同

母校の大学祭を一週間後にひかえた平成十二年十月二十九日(日)、瀬尾・土田両先生をお招きし、阪急中津の東洋ホテルで英文学科五期生同窓会をとり行いました。六年前の阪神淡路大震災の際、同窓生の消息を確認することを目的に母校の大学祭で卒業後はじめての同窓会を開きましたがその時残念ながら震災でクラスメイトを一名失った悲しい現実にも直面しました。

それでも、なつかしい同窓生が集まってそれぞれの近況を報告しあい、以後、毎年クラスメイトの何人かが大学祭で旧交を温めるようになりました。

「いつかは、私達の同窓会にぜひ恩師をお迎えしよう」という願いが、今回やっと叶えられました。当日はお昼十二時三十分から二時間の予定でしたが大幅に超過してしまい、ホテル側には大変なご迷惑をかけながらも大盛会のうちにお開きとなりました。

瀬尾・土田両先生は私達にとってはとても思い出深く、昭和四十三年に私達が入学した時、オーストラリア留学から帰国された直後で英知大学へ着任されたばかりだったと記憶しています。

また、同時に私達のクラス担任でもありました。授業中はオージー・イングリッシュをおりまぜて英語を教えていただいたり、春にはクラスで六甲山へピクニックに行ったことなど、思い出話に花を咲かせました。学生時代の懐かしい写真を前に先生方を囲んで数々の「あの頃」を話し、三十年もの時空を瞬間的にワープし時の経つのも忘れて楽しいひとときを過ごしました。

もう五十歳を過ぎた我々の白髪頭とは対照的に今なお若々しい両先生は昔のままでした。その後、場所をかえて二次会、三次会と…終わってみればすっかり夜も更けていました。

先生方には、学会出張や教会のお仕事など大変お忙しいなか、ご出席いただき、まことに有難うございました。先生方をはじめ同窓生皆様のご健康と今後ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

一九七五年英文科卒業生同窓会報告

'75英文卒　宮崎　信雄

「よくぞ連絡してくれたね。」「案内状ありがとう。」方々より聞こえてくる言葉の先には、二十五年ぶりに会う懐かしい顔があり学生時代にタイムスリップでもしたかのように楽しい時が過ぎていくホームカミングディ。

なんと大学を卒業して二十五年が経過し、'75年卒業の同窓会など夢のまた夢と思って誰も音頭をとらなかったのが現状ですし、まして学生時代クラブ等に入ってなければ卒業後の大学との接点は皆無なのですから…。

私自身、在学中在籍していたクラブ(バドミントン部)のOB戦等で大学の体育館を使用させていただいたり、顧問の花野先生より色々お話を伺う機会もあり大学の変貌ぶりを目にすることができ、どんどん立派になっていく大学に驚いたものです。

クラブの用件にて数年前十一月三日に大学を訪問したとき、同窓会の役員さんたちの一生懸命な姿を見せていただいて、何かお手伝いでもと思い二～三年前よりホームカミングデイ等の準備及び運営の助っ人として、仲の良い友人と参加させていただき、この辺が今回の'75年同窓会開催へのきっかけになったように思います。

英文、西文、仏文合わせて五十六名の参加者を数え、幹事全員が驚きと喜びを共有するところです。数カ月前よりの下準備に何度も友人の喫茶店を借り、名簿の洗い直しから始め、十一月三日の当日を迎えるまで幹事一同よくがんばったと思います。二十五年ぶりに会う同窓生の顔を思い浮かべながら準備を進めるのも楽しい時間かもしれませんね。

当日、遠方より出席してくれた方々に感謝するともに、'75年卒業生のための特別席を提供していただき且つ助成金の援助をしていただいた同窓会事務局に心より御礼申し上げます。

最後に今回の幹事の有志達を紹介します。

《英文一組》
阪本健・黄瀬末吉・和佐順子(横山)・大野佳子(高田)・小松路子(三田)
《英文二組》
国分寺隆・松岡昇峯
《西文》
難波孝宏
《仏文》
高瀬泰子(福嶋経英)・難波陽子(柳川)

激動の時代には激動の時代の英知を

神学科教授　和田　幹男

新築なった教室棟一号館に西尾先生を訪ねたのは、一九六二年のことだった。草が生い茂る野原の中にポツンと建ったその外観から、今日の発展をだれが予想できただろうか。私は間もなく外国に留学したが、いつも将来は英知大学のためにと心に期して勉学に励んだ。その十年後、一九七二年の春から教壇に立った。その頃、現在の本館があり、体育館は完成したばかりだった。他にあったのは、古い木造の建物群。広い運動場、貧弱な教授陣、小さな図書館と教育環境は整っていなかった。が、多くの若い先生と意欲的な学生がいて、これから大学を造るんだという活気があった。私がこの大学に来て得た最初の印象は、性格的に角のない、素直な学生が多いということだった。この気風は今も続いている。それは大学草創期の学生が残してくれた貴重な遺産であり、今後も大切にしたいと思う。

その後、研究棟や図書館、チャペル、学生会館、クラブハウス、研究棟二号館、三号館、コロクトーリウム、タワー、それにキャンパスの美化と、外面が整い、教授陣も充実して一学部五学科と大学院博士課程をもつまでになった。図書館もすばらしいと思う。六甲山には、セミナーハウスがある。この恵まれた現状を見ると、昔の学生たちには申し訳ない気持ちになる。ところが、残念なことに、最近、不況が長引き、少子化が進み、恵まれた現状も生かせなくなりつつある。これはまた草創期のように少数の学生を大事に育てるという英知大学の原点に戻れ、との呼びかけかもしれない。右肩上がりの安定した時代は終わった。その時代にはその時代の英知が必要だった。激動の時代にはその英知は通じない。激動の時代にはその時代の英知が必要である。この新しい英知とは何なのか、模索しなければならない。そのため同窓会の諸君にも力を貸していただきたい。

関東支部便り

「如何に同窓会を活性化するか？」

'78仏文卒　永森　孝夫

これは我が同窓会にとって永遠のテーマではないでしょうか。

一九九一年に産声をあげて以来一度として苦労をしないでイベントを実施できたことがありませんでした。

毎年色々工夫しながら呼びかけをしているつもりですが、現実は中々厳しいですね。

ただ、継続は力なりとはよく言ったもので年を追う毎に少しづつではありますが、新しい会員の方が出席して下さるので振り返ってみると『随分層が厚くなったなあ』と、感じるのも事実です。

さて、同窓会の活性化を考えるためには、まず　①これまでに行ってきた事とその反省　②その中で継続すべきものと止めるもの　③今後の方向性の決定　と考えていくのが順当だと思えるので、以下にまとめます。

①について…A・支部総会（兼食事会）B・ボーリング大会　C・ホームカミングデイの報告会兼忘年会　D・情報ネットワークの作成　E・機関紙の発行　F・講演会　他。

②について…是非継続したいのはA・D・E・F。

③について…直近の役員会で決めたことは、厳しい予算の中で有意義で効率のよい活動を続けて行くためには的を絞り地道に継続して行くという、当たり前の結果になりましたがホームランを狙うよりも確実に塁に進めて行く方が最終的には勝利する確率が高いのと似ているのでは？

ということで関東支部の二〇〇一年の活動予定は六月二十三日（土）に食事会を兼ねた支部総会を行いますので奮ってご出席ください。（王さん又よろしくお願い致します。）

最後にうれしいことを一つ。関東支部の運営を手伝って下さる若い世代の方が三人も現れた事です。（スペシャルサンクス・保坂さん、木下さん、村瀬さん。）この様な事が動機となり今まで意識しなかった会員の方が一人また一人と同窓会に興味を持たれるのは喜ばしい事です。

IT革命は就職活動を変えるか

英知大学就職課課長　須澤　晃

『就職不平等さらに拡大』

一月二十七日の朝刊、こんな記事が目を引いた。『協定やめ格差なくすはずが…就職不平等さらに拡大』『企業、ネット逆手、選抜』『学生、大手に殺到、中小嘆き』と。

昨今の就職活動にはインターネットが必須手段であり、ネット社会のなかでは当然の現象かもしれない。しかしながら、就職情報産業からの数えきれないほどの企業情報を検索し、エントリー画面から自分の情報を送った結果『充実した活動だと錯覚していた』と。

また、ホームページには、女子の採用実績が少ないとか不利であるとか都合の悪いことは出ていない。ついには、情報量に圧倒されて自分を見失っていたのである。

さらに、インターネット上では情報を全方向へ同時に提供できる一面、情報の相手も内容も限定が自由である。ペーパーでも同じ現象は見られたが、いわゆる一流大学生のみに限定した情報提供をおこなっている場合がある。ネット社会では全く個人の世界に限定されるため他人には判らないことが多い。

多くの一般学生はひたすらエントリーの返事を待つが、気が付けば採用終了とか留学帰り対象などの特定の秋採用に代わっている。このように大手企業側の意識的差別行為が、一般学生側には差別被害が拡がっている。

『デジタル・デバイド現象』

ネットワークシステムを構築する先駆け企業でありトップカンパニーでもあるシスコシステムズという会社がある。ネットワーク機器の分野では、シスコ製品は世界市場の八十%のシェアを確立している。そのCEOであるJ・チェンバースは『インターネットと教育こそが、格差をなくすための機会を提供しうる。なぜならインターネットによってはじめて経済規模を問わず、個人や企業、国が同じ土俵でコミュニケーションすることが可能だからである』と。ところが、そのためには重要な条件がある。当然それはインフラ(基盤)としてのコンピュータとネットワーク、そしてそれを駆使するソフトウェア、ヒューマンウェア環境の徹底した普及である。そうでなければ、インターネットによるコミュニケーションと教育の一体化が進むどころか格差が広まり分離二極化が進むのである。この現象をデジタル・デバイド(コンピュータのもたらす社会の分離二極化)という。

アメリカのクリントン前大統領は、二〇〇〇年の一般教書演説でデジタル・デバイド克服を、残る任期における取り組みの最優先事項と掲げた。一九九九年七月の商務省の調査では、年収七万五千ドル以上の家庭では六〇%がインターネットを利用しているが、年収二万ドル以下の家庭では一〇%にすぎなかった。また、白人のネット・アクセスが黒人やヒスパニック系を圧倒していた。そこで、二〇〇〇年においてアメリカは巨額をIT関連に投じて格差是正に取り組み、およその成功を収めた。

さて、こと日本ではどうか。二〇〇〇年六月の三菱総研の調査では、インターネットの利用率は六%とのことである。我が国の首相は前国会の所信表明演説でITという言葉を何度述べたことか。口先で述べた数で改革が進むなら政治家などいらない。今日まで事態は何も変らず、公立学校では『ゆとりの教育』などという訳のわからぬ制度が始まる。塾や家庭教師などの教育産業が新たな事業を始め受験生の格差を生むことになるであろう。デジタル化を提唱しながら、日本のリーダーはその本質とその運用方法を理解できていないため、当然格差がなくなるどころか拡がることになる。また、学生の就職環境では不平等格差となるのは必至である。

『ユビキタス社会の実現は可能か』

ところで、IT革命の先進国は北欧にある。スウェーデンのエリクソン社やフィンランドのノキア社は、一〇〇年以上の通信技術と運用の歴史があり、さらに両国の人口がIT革命に適当であったこともあり、ユビキタス(ubiquitous)社会の実現に最も近い状況にあると言われている。ユビキタスとは「神が同時にいたるところに存在する」というラテン語である。ある特定の場所や人だけが恩恵を受けるというのは革命の本質的意図ではない。人類史上、農業革命も産業革命も、いずれも人類社会の構造を大きく変化させた。IT革命も地球上の構造格差をなくすことに貢献するものと期待される。携帯電話やモバイル

端末、各種のマルチメディア機器がインターネットなどのネットワークで結ばれ、いつでもどこでも誰にでも簡単に使うことのできる環境が存在することなのである。

現在キャンパス内では、約八〇％の学生が携帯電話を持っている。多くの大学ではこの携帯電話による情報の伝達を試みている。就職課でも各種の案内などの伝達は葉書によるものと、同時にEメールによる連絡をおこなっている。個人的にメールアドレスを保有している学生は、約三〇％である。英知大学でも近々に全学生にアドレスを配付するとのことである。ある大学では卒業後も学生時代のアドレスが有効になるように配慮されている。これらは、若い世代において当然のツールとして普及している。そこで、肝心なのはそのコンテンツ（contents＝活用内容）と、人そのものである。環境格差がなくなり利用機会が均等であれば、後はそれを活用する人の心が問われる。

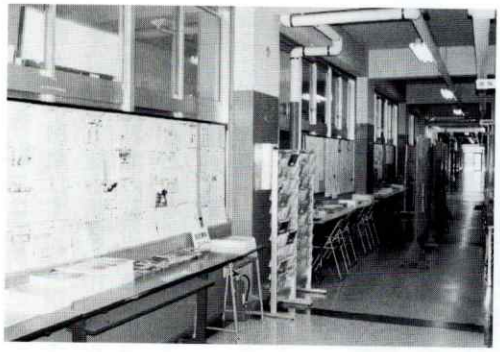
『就職活動に変化が生まれるか』

冒頭の記事に見られるように、今日では過渡期的現象が顕著であり、IT革命が好ましい方向に進んでいるとはいえない。むしろ情報弱者が社会の動きから取り残されている。

未だに不況トンネルの出口は見えない。企業のコスト意識は採用活動の経費にも大きく影響している。コストを削減し、少数の優秀なコア社員のみを採用しコア・コンピタンス（core competence＝中心となる能力による）経営を推し進めようとする現れである。さらに、企業のコンテンツ計画と運営に当たる人材と、作業性の高いことに従事する人材とは当初より区別される。前者は正社員として採用しても、後者は派遣社員やアウトソーシング（外部委託）に委ねられている。学生にとってその見極めは困難を極め努力と我慢のいる時代であり、同時に職業観が問われる。そして、それは就職課の支援活動として重要な役割なのである。

職業観の醸成は、三回生になってからの対処だけでは解決できるものではない。大学入学時より三回生へ向けて、そのカリキュラムは準備されなければならない。本学では既に実施している二回生対象のカリキュラムに「職業学」がある。本年四月からは新たに経営と人材コンサルタントの武野昭氏を講師として迎える。氏は最近に『人と組織を変える・コンピテンシー入門』を出版された。これらの職業観醸成に役立つ授業は、各大学でも盛んに試みられている。人が職業観に目覚め、自己確立への道を歩むためには、親や教職員、もちろん社会がそれを育てる心が重要である。

IT革命は、現在入口に入ったばかりで、その成功は「いかに人に配慮するか」にかかっている。そして、就職活動が機会格差をなくし、教育の一環として取扱われるまでにはまだまだ時間がかかる。しかし、二十一世紀は間違いなくIT化により社会構造が変わる。伴って学生の努力とともに、就職活動の格差がなくなることを望んでやまない。



これからの英知大学

松本　信愛

同窓会の皆さん、いかがお過ごしでしょうか？

わたしもこの三月で丁度六十歳を迎え、英知大学での勤務も三十年となりました。人生の半分は英知と共に！（これから当分は半分以上になります！）

今年の正月の蹴り初め（恒例のサッカー部OBと現役の親睦試合）で靱帯を痛め好きなテニスも一ヶ月ほどおあずけでした。（「年を考えて！」という声が聞こえてきます…）

さて、皆さんご存知のように、少子化のあおりで、大学、特に私学は学生確保の危機に見舞われています。受験生の方からみれば、行きたい大学に行き易くなったということは、好ましいことでしょう。（かといって、ゆとりある高校生活とはほど遠いようですが…）しかし、私学、特に英知のような「文学部だけの小さな私学」にとってはまさに死活問題です。もちろんユニークな特徴があればいいのですが…

昔の英知の特徴は、こぢんまりとしていて、学生と教職員が親しく、気持ちのよいつき合いができ…と、現在もっとも羨望されるようなものであったと思います。今でも、二十年、二十五年前の卒業生の方が、数年前の卒業生よりもよく知っていて親しい卒業生が多いと感じるのは年のせいでしょうか？

一時一八〇〇人いた学生も今は一四〇〇人近くになっていますが、それでも本当に「家族的」な大学にするのには多すぎると感じています。もちろん数の問題だけでないことは承知の上ですが…

卒業生、在学生、教職員が心通わせることのできる「英知ファミリー」がもっと打ち出せればと思います。

IT革命は就職活動を変えるか

英知大学就職課課長　須澤　晃

『就職不平等さらに拡大』

一月二十七日の朝刊、こんな記事が目を引いた。『協定やめ格差なくすはずが…就職不平等さらに拡大』『企業、ネット逆手、選抜』『学生、大手に殺到、中小嘆き』と。

昨今の就職活動にはインターネットが必須手段であり、ネット社会のなかでは当然の現象かもしれない。しかしながら、就職情報産業からの数えきれないほどの企業情報を検索し、エントリー画面から自分の情報を送った結果『充実した活動だと錯覚していた』と。

また、ホームページには、女子の採用実績が少ないとか不利であるとか都合の悪いことは出ていない。ついには、情報量に圧倒されて自分を見失っていたのである。

さらに、インターネット上では情報を全方向へ同時に提供できる一面、情報の相手も内容も限定が自由である。ペーパーでも同じ現象は見られたが、いわゆる一流大学生のみに限定した情報提供をおこなっている場合がある。ネット社会では全く個人の世界に限定されるため他人には判らないことが多い。

多くの一般学生はひたすらエントリーの返事を待つが、気が付けば採用終了とか留学帰り対象などの特定の秋採用に代わっている。このように大手企業側の意識的差別行為が、一般学生側には差別被害が拡がっている。

『デジタル・デバイド現象』

ネットワークシステムを構築する先駆け企業でありトップカンパニーでもあるシスコシステムズという会社がある。ネットワーク機器の分野では、シスコ製品は世界市場の八十%のシェアを確立している。そのCEOであるJ・チェンバースは『インターネットと教育こそが、格差をなくすための機会を提供しうる。なぜならインターネットによってはじめて経済規模を問わず、個人や企業、国が同じ土俵でコミュニケーションすることが可能だからである』と。ところが、そのためには重要な条件がある。当然それはインフラ(基盤)としてのコンピュータとネットワーク、そしてそれを駆使するソフトウェア、ヒューマンウェア環境の徹底した普及である。そうでなければ、インターネットによるコミュニケーションと教育の一体化が進むどころか格差が広まり分離二極化が進むのである。この現象をデジタル・デバイド(コンピュータのもたらす社会の分離二極化)という。

アメリカのクリントン前大統領は、二〇〇〇年の一般教書演説でデジタル・デバイド克服を、残る任期における取り組みの最優先事項と掲げた。一九九九年七月の商務省の調査では、年収七万五千ドル以上の家庭では六〇%がインターネットを利用しているが、年収二万ドル以下の家庭では一〇%にすぎなかった。また、白人のネット・アクセスが黒人やヒスパニック系を圧倒していた。そこで、二〇〇〇年においてアメリカは巨額をIT関連に投じて格差是正に取り組み、およその成功を収めた。

さて、こと日本ではどうか。二〇〇〇年六月の三菱総研の調査では、インターネットの利用率は六%とのことである。我が国の首相は前国会の所信表明演説でITという言葉を何度述べたことか。口先で述べた数で改革が進むなら政治家などいらない。今日まで事態は何も変らず、公立学校では『ゆとりの教育』などという訳のわからぬ制度が始まる。塾や家庭教師などの教育産業が新たな事業を始め受験生の格差を生むことになるであろう。デジタル化を提唱しながら、日本のリーダーはその本質とその運用方法を理解できていないため、当然格差がなくなるどころか拡がることになる。また、学生の就職環境では不平等格差となるのは必至である。

『ユビキタス社会の実現は可能か』

ところで、IT革命の先進国は北欧にある。スウェーデンのエリクソン社やフィンランドのノキア社は、一〇〇年以上の通信技術と運用の歴史があり、さらに両国の人口がIT革命に適当であったこともあり、ユビキタス(ubiquitous)社会の実現に最も近い状況にあると言われている。ユビキタスとは「神が同時にいたるところに存在する」というラテン語である。ある特定の場所や人だけが恩恵を受けるというのは革命の本質的意図ではない。人類史上、農業革命も産業革命も、いずれも人類社会の構造を大きく変化させた。IT革命も地球上の構造格差をなくすことに貢献するものと期待される。携帯電話やモバイル